Color Science Association of Japan

使用ドレープからパーソナルカラーを考える

パーソナルカラー研究会
大島未有希
小林　光夫

1．はじめに

人それぞれにいわゆる似合う色が存在することは、経験上よく知られている。パーソナルカラーアナリストは、人がその似合う色を選択する際に、適切な助言を与える事を業務としている。しかしその助言は、時には恣意的に傾くことがあり、客観性に乏しいのではないかとの疑問が起こる。似合うという感覚的事象を、科学的・客観的に裏付けられないであろうか。パーソナルカラー研究会（以下PC研究会と呼ぶ）は、この問題の究明を大きなテーマの一つとしている。

わが国では、“春”、“秋”、“夏”、“冬”の4カテゴリに区分される色布（以下ドレープと呼ぶ）のセットを用いて、個人に似合う色のカテゴリを定める診断手法（以下四季法と呼ぶ）が広く行われている。PC研究会のドレープ現況調査班は、四季法で実際に用いられている種々のドレープセットを調査し、その色彩的特徴や望ましい色種についての分析を試みてきた[1]、[2]。また、分析の過程を通じて、より精密な分析のためには資料のデジタル化が必要であることも分かってきた。これらについて論じる事としたい。

2．ドレープの色彩的特徴

調査の対象としたどのドレープセットも、各季7～42色のドレープで構成されていた。ドレープセットの中で、とくに人を四季のカテゴリに分類診断するための特定のドレープのことを“テストカラー”と呼ぶが、それは各季7～15色であった。

ドレープのとくに各季ごとの色彩的特徴を調べるために、15セットを選び、各ドレープの分光反射率を測定（ミノルタCM2002による）し、Munsell表色値を求めた。表色値を各季ごとに比較したところ、次のことが分かった。

- ●ドレープの色分布パターンが春と秋、および夏と冬とは互いに似ており、春・秋群と夏・冬群間では異なっていた。
- ●テストカラーとセット全体の色分布を季節ごとに比較すると、パターンがよく似ており、テストカラーは各季節の特徴を反映していると考えられた。
- ●テストカラーについて詳細に検討したところ、多くのドレープセットにおいて、色相については春・秋群と夏・冬群の2群に分かれた。明度については春、夏はそれぞれ秋、冬に比較して高く、同様に彩度については春、冬はそれぞれ秋、夏に比較して高かった。

以上のようにドレープは、四季ごとに明確な特徴を持っていることが示された。

3．対応色調査の資料の分析

カラーコーディネートおよび診断に必須の色種を知ることを目標とし、3年以上の実務経験をもつカラーアナリストを対象に、次のような調査を行った。日本に最も古くに導入されたと思われる特定のドレープセット（以下旧と称す）を基準とし、それと異なるドレープセット（以下新と称す）について、各季ごとに基準の色の代わりに使える色（これを対応色と呼ぶ）を選び、基準の色との相違を調査した。詳細な検討は今後を待たねばならないが、新旧間で色の大きな変化は無いものの、春は新の明度が高いこと、冬は対応色の数が多く秋は少ないこと、などがわかった。

4．おわりに

実用ドレープの性質を客観的に知りたいとの素朴な要求から出発した調査に基づき、試みの分析を行ったところ、有用な結論を導き得ることが示唆された。しかし、前述の分析はすべて人手によって行ったゆえに、膨大な時間がかかり、誤記や誤計算もあり得る。さらには、手書きの調査資料を他の人が容易に利用するわけには行かなかった。調査資料の有用性を考えると、今後は資料をデジタル化し、多くの方々の研究に資するように利用の便を計る必要があろう。そのような方向で現在準備を整えつつある。

最後になりますが、ドレープ調査に参加して下さった会員の皆様に、深く感謝いたします。又、調査を進めるにあたって遠山令子さんに惜しみない助力を頂きました。有り難うございました。

参考文献

1）大島・門田・村上・鈴木、パーソナルカラリストが使用する カラードレープの色彩に関する検討、日本色彩学会誌、Vol.23,SUPPLEMENT,pp.40-41(1999).
2）大島・遠山・門田・村上・鈴木、パーソナルカラリストが使用するカラードレープの色彩に関する調査報告、日本色彩学会誌,Vol.23,SUPPLEMENT,pp.94-95(1999).

NII-Electronic Library Service